

橋 詰 良 一 著

「家なき幼稚園の主張と実際」より (三)

第六 純情発露の日記

特に私は幼児と相触れる若き女性の純情が、日々にきらめき輝く有様を書きとめておくように習慣づけることに努めました。すなわち何よりも先に、日記帳を用意しておいて、「明日の心づもり」と「その日その日の所感」とだけを簡単に書きつけるだけ。唯一の義務として若い娘さんに課したものです。(前項の当用日記を使用した園の日記の他です)

これは、私と娘たちが連絡されている唯一の鎖ですが、娘の純情と幼児の間に頻発する火花のひらめきを見させてもらうための頼みに他ならぬもので、一般の教育界に見るような職業義務による保育案とは本質において違っています。(たとえその形においては相似たものであっても)

私の園での帳簿といえはわずかに左の三種です。すなわち、

「明日の心づもり」普通のノートへ好きな方法で書かせるもので、晴の場合と、雨の場合の両様を簡単に記入しておきます。保育案のようなものです。

「所感録」これが最も大切な帳簿で、これを見ると純情と神性の相触れて起る心火の輝きが見られるのです。

「日記」(普通の当用日記を用品です。)記入の主なもの集合所の内外温度といろいろのことをして行なった時間とです。

このほかに事務的にするための帳簿は作っているところもあり、作っていないところもあります。

◇ 児童愛の日記から

若い先生たちがおもしろいおもしろいに書きつけた日記が私の書齋には幾十冊と重ねられてあります。八年の間、私は毎朝毎朝早く起きてこれを見て行くのを楽しみにしてきました。(その帳面は日記

などと一緒に毎日午後私の宅へ届けられるような便宜が作ってありますので、私が毎朝見たのを園へ返すようにもなっています。

(それは私の住宅地から先生が大抵一人ずつ各園へ通っていてその便宜をしてくれるようになっていのです)そして見るうちに涙をこぼすことがたびたびあります。その飾りけのない、一口に言えば初心な下手な書き方で児童愛を卒直に表わしているかわいらしさ、無邪気さ、そしてその中から尊いものがチラ、チラとほの見ゆる気高さに打たれて、胸詰まるようになる時、すぐに涙がこぼれます。

私はこのようなとき、その文の横に赤い印をつけておきます。すると、先生たちは、その部分だけを別の紙に書いて私へ届けることになっていますが、それだけでもずいぶんの量になっています。

どうしても、それを世の母姉たちに見てほしいとおもって、娘たちに取らせている雑誌「愛と美」の素材も実にこのなかから摘まれているのですが、摘まれた中から更に摘み分けて見た宝石(私のための)の幾つかを、是非見てほしいと思います。

初めのうちは、ずいぶん拙い書き方をしていた娘たちの文章が、いつとはなしに奔逸してきれいな名文章となるには驚きますが、純愛それは恋愛の場合にでもに伴う神の恵与だと考えた

りしますと一層頭が下がります。

教育というようなことに何の予備知識もない初心な娘たちが、かわいいかわいから生み出していく愛の道、愛のいなみ、おのずからに養われていく児童愛の理解その鋭さ、清らかさには、更にゾツとして衿を正さしめられる時があります。

ここに摘まれてある文には、一字一字も修正をしてないことを申しそえておきます。

(注) 読者のなかには、子どものつかっている方言の解されないのが多いことだと思えますが、そこにもまた幼児生活を髣髴させている力があるのだとご辛抱願います。

◇ かわいい鳩が

智恵子

今日は正月の十日です。久々で幼児たちに会える……と思つて飛び立つほどうれしい。みんなのあいらしい顔を一人一人連想しながら園に行くと、一番に越野さんが「先生おはよう!!」とたもとをつかむ。男の子も女の子も喜びにハチ切れそうな顔をしてブラさがる。

「先生、また鳩が死んだのよ」って悲しそうな声を出して誰やらつげにきた。アム、またしても鳩の死……震えながら出て見ると、元気に屋根で遊んでいるのは十四羽しか無い。二十羽もいた

のに……と思うともう涙です。

「先生死んだ鳩かわいそうね」と言つてじつと死んだ鳩の方を見つめている。子どもたちの心はどんなだろう。(箕面)

◇ 柳を振つて

治子

お土産の飾り枝のこしらえに取りかかる。柳の枝へつけるために子どもの手でできた自由製作を配ると各々にあてがわれた小枝をテーブルの下において、あのおぼつかない手つきで羽子を、羽子板を、花を、と一つ一つ数の増すほどに美しくなるのを見て皆の顔もかがやいてきます。

窓の方を向いて夢中になつていた小さい男の子がさもうれしうらに、

できたできたうれしいよ

できたできたうれしいよ

と枝を高くさし上げて、振りながら歌いました。いい曲だ、だまって聞き入ったがノートにひかえてみました。皆も口の中で合唱しているように見えました。(池田)

531—531—2255—3—0

チキタ チキタ ウレイン チ

531—531—2255—1—011

チキタ チキタ ウレイン チ

◇ おひなまつり

堀尾さん、川島さん、加賀さんのお家からおひな様やたくさんの美しいお道具を貸して下さいました。天神様、お姫様、特に長いお振袖の黒い目のお人形、四人ずらつと赤い毛せんの上に並んだ。その前にお花やお菓子も上げました。舟木さんも急いでお家へ走つたかと思うと男の子、女の子の西洋人形をかかえて来た。杉村さんの筒袖のお人形もお仲間入り、賑やかに来た。男の子も女の子も大喜びで私の顔や人形の着物をのぞき込んでそばを離れません。川島さんのお母さんも手伝つて下さった。そのうち加賀様から赤白のおいしいおまんじゅうを二つのお盆いっぱいお雛様と子どもさんと下さった。子どもたちには思いがけないことで一層のよるこびに踊らんばかりです。

皆の顔もかがやいた。朝拜がすむとお部屋へ走りこんでご馳走にとりかかる。三ほう折る子、お料理する子、見る間におひな様の前へずらつとならぶ。「お人形さんはあんまりご馳走が多いので困つていなさるでしょう……」みんなの子へ、満足するだけお菓子を分けて、附添の女中さん、じいやさんにもお仲間入りをしてもらつて、ほんとにうれしくいただきました。「今日はいちんち、おへやを離れるのはイヤよ……」と子どもたちは人形の帯や

着物をいじってつきつきりです。その前で弁当もいただきました。一時からは橋詰先生もいらして「星の国からゆらゆらと」のお唱歌も聞いていただきました。ほんとにおもしろい一日でしたよ。愉快な一日でございましたのよ。(以下略)

◇ よもぎもちつき

雪が舞って寒いのに枯草のかげにはもう緑の春のお仕度ができています。雑草の小さい芽にまじってよもぎも白っぽい芽を出しました。ままごとをするとして、子どもはそのよもぎをかきわけかきわけがします。そしておもちつきです。平たい石の白に石ころのきね。おもちつきがはじまりました。はじめはだまっついでいきましたが途中から歌い出しました。

ほんべんほん      ほんべんほん

ほんべんほんのう      ほんべんほん

ほんべんほん      ほんべんほん

ほんべんほんのう      ほんべんほん

そのかわい声、菊ちゃんはまだおねねの時には、おばあちゃんのおっぱいがないとおねねできない子どもですの……。

神様のうた、子どものうた……こうしてつかれたよもぎはみんなでまるめました。どの手もどの手も濃く染まりました。「よもぎ

のいいにおいがしますよ……」と言うとみんな自分のお手々をにおってみて「ほんに、おもちのにおいがする」と言いました。お豆さんほどの大きさのおもちがどっさり並びました。(宝塚)

◇ 園のお父さま

智恵子

「今日ね橋詰先生がいらっしやるのよ、十時ごろに」って朝行くなり、そうお伝えすると皆大喜び。

羽織をぬいでしまいたい位ポカポカ暖かい陽あたりのいいお庭で子どもたちと共にお待ちしてたが「橋詰先生はまだ？」と聞きに来る子どもの顔を見てじっとしていられない。森垣先生に「みんなで停留所までお迎えに行かないこと？」ってお伺いすると「ええそうしましょう。お手々をつないで皆一緒にね」とほほえみながらおっしゃる。ご病氣上がりと思われぬほど今日は元気に喜びにたったごようすなので私までうれしくなってくる。春陽を背に一杯浴びて躍り上がる様な足どりで駆け出す私たちの群、この大地は私たちのものよ!! 　　つて高らかに叫びたくなる。この群は一ヵ月ぶりだなつかしい園のお父さまにお会いできるのだものうれしいのはあたりまえ、小躍りするのも当然だ。「ああ橋詰先生が、あ、橋詰先生や」と玻璃窓を通して見つけた幼児たち、われ先にと走り出す。辻さんは先生の重いカバンをさげて喜ぶ。

平素先生の側へひつつきにこない男の子たちが今日はまっさきにぶらさがる。お手々のつなげなくなった子は上着をつかむ、ついには喪章をひっぱる。橋詰先生もうれしげにニコニコして慕い寄る幼児等のおつむをなでていて下さる。ほんとうにうれしい一日。(箕面)

#### ◇ 粘土とリ

朝早うから子どもを連れて西の方の広場へ粘土取りに行きました。よい粘土をそれぞれおかごに一ぱい取って、皆でエッサエッサと大喜びでもって帰りました。今日はさっそくそれをねって粘土細工です。小さな芸術家は小さな手を器用に働かせていろいろなものを作ります。長くのばして「これはへび」まるくまるめて「おだんご」、バナナ、お舟、お鉢、土びん等上手にできたのをお土産に持って帰りました。(雲雀ヶ丘)

#### ◇ ジャガ芋掘り

奈良から帰って今日で三日目、子どもたちは健康に、見違えるほど大きくなっている。誰の顔を見ても元気でほちきれそうである。今さらの様に子どもの成長のいちじるしいのに驚かされる。それにしても鳩の家の前の畑の作物もずいぶん大きくなった。何

もかもしばらく見ない間にすっかり成長してしまった。トマトはまだ少し青いけれど、ジャガ芋は収穫を待つばかりに大きくなっている。小さな手によって真心こめて毎日つちかわれたたま物を見る時、何かしら感激に胸がいっぱいになる。もうジャガ芋をそろそろとり入れねばならぬ。「今日はジャガ芋掘りをしましょうか」と子どもたちに相談すると「うれしいな、ほんとにジャガ芋ぼくたちとっていいの」と大喜びで賛成する。「さあ皆お砂遊びのざるを持って来ましょう」「それからコップもね」一度にかけ出したかと思うとあちらからもこちらからもいろいろなものを持ってきた。渡辺先生は大きな鍬を持ってこられた。「さあ掘りましょう。この木をうんと引っぱってごらん」この声も待たず一度に十幾本の手が出る。手の方からみ合って思うように引っぱれない。はたに立って見ている子どもの顔も異様にかがやいている。やがて「うん」と一つ引っぱり上げられた。大きなや小さいのが五つ六つぶら下がって出てきた。「やあ出たあ、ジャガ芋が出たあ」大きな声で勝どきをあげる。見る見るうちにあとの五、六本も引きあげられた。「先生こんなに大きいのがあった」「先生こんな小さいの」ほんとに子どもの握りこぶし位なのや小さい豆さんのようなのがざるの中に入れられている。ぬいたあとをスコップや鍬で掘りかえずと、また五つ六つあった。皆で大小

とりまげて二十六個位とれた。「先生これ皆どうするの」「さあ、これ皮をむいて、煮て、皆でいただきますしよるか」「ほんと、ぼくたち食べるの、ええ、食べるの」「ええほんとうよ」「うれしいな、うれしいな」またしても大喜び。今までに一度もこんな経験を持たないから……うれしいのだろう。(以下略)

#### ◇ 武庫川の水遊び

よね子

武庫川のお川遊び。夏にめぐまれたこの自動車幼稚園のみのもの、お川遊び。それは幼児たちにとつて一番愉快な、そして比類なき園のプライドのお川遊びが参りました。

美しい友禅の半袖に朱塗の下駄または軽いセーラー服に白い海水袋と水筒をかけた姿、みんな軽装に勇みおどった幼子が、自動車に一ぱいになって新町につく。幸田先生が乗って下さる、木内先生も……歌もひとしおにぎやかに……長い長い西成大橋から新装の阪神国道を滑っていく気持ちは、まあ何と云うたらいいでしょう。「兄ちゃん、急行出してちょうだい」と注文しますと、運転手の兄ちゃんは「オーライ」とばかり二十五マイル、三十マイルものスピードを出して下さる。トラックも電車も見ると見るうちに追いついて……子どもたちは得意に手をたたきます。

武庫川の阪急停留所で待ち合せて下さる。母様姉様たちと一緒に

に、子どもたちはころぶようにして、松の下の着物の置場から、川へ、川へと飛び出します。オシャモジ、水鉄砲、バケツその他のいろいろの玩具を手に手に水煙を立ててきれいな砂川を右往左往……水合戦、鬼ごっこ、運河掘り、いろいろなことが思いのままに始められます。おもいのままに創作されます……細かい細かい砂、ひえびえとした水底のなめらかな感触、赤や青黄、色とりどりの美しい配彩、朗らかにすみわたった群青の天空、ほんとに子ども雑誌のような思いがしてうれしさに胸のおどるのをおぼえました。二度も三度も、ぬれた身体を日に乾かしてはまたぬれて木陰のお昼飯にご馳走を頂きます。その時のうれしさ、黒く健康そうな血色、そして包みきれぬ笑顔……ああ、ほんとにこうした純々なごやかな心の芽ばえを、いつまでもいつまでもきずつけられることなしに大切に育ててゆきたい……そうあってほしいと祈らずにはいられない。生きとし生けるものに、この幼子の無邪気さ、いつわりなき飾りなき心の一つさえも、生涯失わずあるものでしたら、まあ、この世の中はどんなにか明るく楽しく美しいものでございませう……大事そうにかにや、せみや、バッタや貝の数々をお土産に、活躍後の軽い疲労を自動車の風にやすめてやすやと午睡のあどけない顔に、祈りと、感激のほおずりを致しますのは私一人ではございませんでしょ。(大阪)

◇ クローバー

和子

お並びをするなり堤防へとまいました。まだ朝早いので涼しい風が吹いて、何となくすがすがしい気持ちでした。高い坂をこるころと和夫さんがころがりながら降りて行きました。こちらには白いクローバーの葉の上にくらがって喜んでゐる弘ちゃん、向こうの方にも白い子どもの姿「やあ東の幼稚園が来ました」と叔母さんの声に見るとたくさん走ってきます。「お早う！」ってこちらから合図をしたら私のまわりへと集まって「お早う先生」ってまつまりました。みんなでクローバーの葉の上ですわって白い花を持ちきれないほど摘んでいるうち、私はふと四ツ葉を見つけてましたので、「S先生四ツ葉よ」って言うのと幼児は「先生ここに」と言いましたら道子ちゃんが「そしたら私家に帰ったらおいしのお菓子がもらえるかもしれんわね」って申しました。(西十三)

◇ ささ舟流し

治子

今日はいつもあり水が多いのでみんな川の辺を離れない。「ささ舟流しをしよう」と相談がきまって裏の土手のささを折っては皆で造り「さあ一二ノ三で流しっこしましよ」やあ僕のが一番だ、小西池君のはくるくるまいしたので負けたよ」と一生

懸命……オーストリアと勢いをつけると一層早く流れる気がする。私共も流れについて行った、橋の下を通っている間はじつとしては待っている子もたちは、洋服や、エプロンのよごれ見えるのを待っている子どもたちは、洋服や、エプロンのよごれるのよりも舟の方が大切なので大人には到底想像つかない現われである。

Yちゃんが水の中へ足をつけて「先生こんなの」と見せに来る。「どうしたの」と尋ねると、「村主君がはいれ言いよったから」といかにも真面目くさったようす。お友だちの言うことはよく聞く……かえって親や先生よりも……。(池田)

◇ 穴掘り

おちほ

昼からお庭で穴掘り、皆が一生懸命になって、今度は東南のすみへ大きな大きなのを掘りました。小さな子どもの力でも大勢よって、皆が力を合わせてすると、どんな事でもできます。掘って行くうちによい粘土ができて大喜びです。今度はお団子をたくさんこしらえました。(雲雀ヶ丘)

(つづく)